

認知症に関する ACP 研究のソーシャルワーク実践モデルを活用した分析

○ 県立広島大学大学院 牧原 拓矢 (010125)

越智 あゆみ (県立広島大学・005018), 細羽 竜也 (県立広島大学・005039)

キーワード3つ: アドバンス・ケア・プランニング、認知症、ソーシャルワーク実践モデル

1. 研究目的

我が国の認知症高齢者は、将来急増すると見込まれている。高齢者については、その終末期において、本人の意思が適切に反映された生活を送ることができるよう、人生の最終段階を見据えた「アドバンス・ケア・プランニング (Advance Care Planning 以下、ACP)」の活用を意図したガイドラインが発表された。加えて、認知症高齢者の意思が適切に反映された生活となるように、「認知症の人の日常生活・社会生活における意思決定支援ガイドライン」も策定された。

ガイドラインが策定された理由の1つに、医療・ケアなどのサービスに、認知症高齢者の意思が十分反映されていない実態がある。ACPの実践目的の1つは、治療やケア等に関する本人自身の自己決定支援であり、本人の意思の反映が十分ではない認知症高齢者の治療・ケアの選択の実態を改善することが期待できる。このような ACP 実践は、ソーシャルワーク実践として捉えることのできる要素を内包しているとも考えられる。しかし、ACP 実践のどのような要素がソーシャルワークの取り組みとして解釈できるのか、理論的な観点から、これまでに検討されてはいない。

本研究では、石川¹⁾による「4つのシステムからみた3つの実践レベル」の枠組みに注目した。石川の示した枠組みは、縦軸にワーカー・クライアント・ターゲット・アクションの4つのシステムを配置し、横軸にマイクロ・メゾ・マクロの3つのレベルを配置したものである。本研究では、石川が示した枠組みを用いて、認知症高齢者に関する ACP 実践の知見をまとめ、ACP 実践をソーシャルワークとして捉えた場合の特徴を明らかにすることにした。

2. 研究の視点および方法

本研究の方法は、文献研究である。谷本・芥田・和泉 (2018) を参考に、文献検索サイトとして、医学中央雑誌 Web 版と、EBSCO 社の CINAHL Plus with Full Text と MEDLINE with Full Text の同時検索システム (CINAHL/MEDLINE) を用いて検索を行った。検索期間は、谷本・芥田・和泉 (2018) の対象期間を考慮して 2017 年 4 月から 2023 年 1 月までとした。医学中央雑誌 Web 版では、キーワードを「アドバンスケアプランニング」OR「Advance care planning」AND「認知症」で検索し、原著及び抄録ありで絞り込みを行った。CINAHL/MEDLINE では、キーワード「Advance care planning」AND「Dementia」AND「Japan」で検索し、抄録ありで絞り込みを行った。

3. 倫理的配慮

本研究は、先行研究を分析するものであり、人を対象とする研究ではないが、「日本社会福祉学会研究倫理規程」及び「研究倫理規程」にもとづく研究ガイドラインを遵守し実施している。本発表に関連して、開示すべきCOIはない。

4. 研究結果

(1) 文献の抽出結果

データベースから52件の論文が抽出された。研究者3名が論文を精読し、あらかじめ定めた選定・除外に照らして、最終的に17件を選定した。

(2) 文献の分類結果

社会福祉学を専攻とする研究者と10年以上の経験がある福祉専門職とで、17件の研究内容を石川の枠組みに沿って分類した。クライアントシステム×マイクロレベルに8件、ワーカーシステム×メゾレベルに5件、ワーカーシステム×マイクロレベルに2件、クライアントシステム×メゾレベルに1件、ターゲットシステム×マイクロレベルに1件となった。

クライアントシステム×マイクロレベルの結果は、以下のとおりであった。

- ①認知症高齢者の状況：がんよりも死亡率が低く、生存期間が長いことも指摘されていた。
- ②家族介護の状況：生命維持治療について、家族が本人に確認しておらず、家族の意思が最も尊重されていた。疾患名を本人に告知せず在宅治療を実施している場合、家族の生命維持治療についての選好性は、同居人数が多く、介護期間が長期に及ぶほど低い傾向にあった。
- ③事前指示書とACPの実践効果：主な効果として、(1)水分補給・栄養補給の方法に関する選好において、本人の選好が反映されていたこと、(2)家族介護者に至っては、ケアの専門家がACPに関与することで、家族介護者の介護への不安が低下していた。

5. 考察

本研究で石川の枠組みを用いてACP実践を分類してみると、クライアントシステム×マイクロレベルに分類される文献が最も多かった。このことは、ACP実践が認知症高齢者とその家族の課題に焦点をあてて、解決につながる効果を示している取り組みであることを示唆している。

(文献)

石川久展 (2019)「わが国におけるマイクロ・メゾ・マクロソーシャルワーク実践の理論的枠組みに関する考察」『Human Welfare』11(1), 25-36.

谷本真理子・芥田ゆみ・和泉成子 (2018)「日本におけるアドバンスケアプランニング研究に関する統合的文献レビュー」『Palliative Care Research』13(4), 341-355.